もしも野菜に異常が発生したら　〈第10回〉

解決 トラブルシューティング

今なら間に合う！ 間に合わない？

（タキイ種苗開発部）

野菜は一つとして同じ生育をたどるものはありません。低温・高温、乾燥・過湿、曇天・日焼け、多肥・肥切れetc.、一度バランスを崩した野菜は、トラブルとなってその症状を現します。そこから対応できることもあれば、もはや手遅れな場合もあります。このシリーズでは回復可能な事例はその対処例を、無理な場合は次回の対策等を紹介します。

本号のテーマ　**春まきの果菜類の発芽不良対策**

対応可能な処理　対応不可能

●ケース：春に播種した果菜が発芽しません。　対策

- 地温不足・乾燥が発芽不良の原因である場合は、発芽遅れの種子に対し対処方法①②を行うことで、発芽することもあります。
- 播種後、発芽所要日数を過ぎても発芽せず、種子や幼根が過湿や腐敗で傷んでいる場合は、まき直しが必要です。まき直しの際は、①～③の対処方法を参照ください。

◎原因

発芽に必要な次の４条件を、すべて満たしていないと発芽不良の原因になります。

適度な温度：発芽には空気中の温度よりも、土中の温度「地温」が重要です。

適度な酸素：生活空間の「空気」程度は必要です。

適度な水分：水分が多すぎると過湿で種子が腐敗し、少なくても発芽スイッチが入りません。

種子の活性：有効期限切れの古種子などは種子寿命が尽きていることがあります。

◎対処方法

①地温確保：苗床播種の場合、必要地温が確保できる電熱マットなどの加温設備と、播種後の播種床保温用に被覆資材を用いて、最適地温の確保に努めます。圃場に直まきする場合は、播種の10～15日前までに畝のマルチ被覆を終わらせ、発芽に必要な地温を蓄えます。高畝や、トンネルの利用なども効果的です。

②適正な水分の保持：播種後は発芽に必要な量だけ潅水します。種子が大粒の品目ほど過湿で傷みやすく、果菜類ではカボチャ・スイートコーン・マメ類は潅水過多に特に注意が必要です。種子の深まきや覆土のしすぎにも注意します。



↑低温期に圃場へ直まきする場合、マルチやトンネルを使い地温を確保する。



↑苗床を保温する「農電園芸マット」。

③硬実種子の浸水処理：オクラ・ニガウリなどは種皮が厚く吸水に時間がかかり、発芽が遅れることがあります。半日～１日程度種子を水に浸漬し、吸水させてから播種すると発芽が速やかになります。

春に播種する果菜類の発芽に必要な地温と発芽所要日数の目安

品目	発芽可能地温	発芽最適地温	発芽所要日数
トマト	20～35℃	25～30℃	3～5日
ナス・ピーマン	20～35	28～30	3～6
キュウリ・スイカ・カボチャ・ニガウリ	15～40	25～30	2～5
スイートコーン・インゲン・エダマメ	15～35	25～30	3～7
オクラ	15～35	25～30	4～7

※発芽所要日数は発芽可能地温が確保された場合。



↑ニガウリ（左）やオクラ（右）などの硬実種子は、播種前に浸水処理をすると発芽のそろいがよくなる。